

資料館・博物館のイメージは、一言でいえば、古めかしい、カビ臭いイメージになる。土器の破片が並べてあったり、古地図・古文書が並んでいたり、いまではどこを探しても見あたらない古い農機具が展示してあったり、先人の残して行ってくれた種々の記録であれば古いのも当然である。無くなりかけたものを、忘れ去られたものを残そうと言うのであるからそれも仕方がない。そのようなものの中に貴重な素晴らしい宝物が隠されているのだ。貴重な資料は後世に残して行かねばならない。我々の先祖が何を考え、どのようにして生活してきたかを語り知る手がかりはこのようなものの中にしかない。だからそれらを保存し後世に残すことが必要なのである。ただ残しておけばよいというのではなく、それはどのような資料か調べがついた形で、整理されたものとしてでないと価値は半減する。また、いつでも利用可能な形になっていなければならない。すべてを展示することはできなくてもそれに準じた方法が採られていなければならない。つまり知りたいと思う人にそれらが学習の材料としていつでも提供できなければ意味がない。

平成8年1月に学術審議会から「ユニバーシティー・ミュージアムの設置について」という報告が出された。大学の研究・教育活動によって生み出される多くの学術標本は将来にわたって利用・活用されるべきものと定義し、それらをユニバーシティー・ミュージアムに保存収集すべきであると説いている。これを受けて金沢大学資料館でも、収蔵の基本方針なるものを策定した（資料館だより No.15）。基本方針の中で興味深いのは、大きく文化史資料、自然史資料そして科学技術史資料に別けられ、古いものだけでなく、現時点でも利用されている資料（標本など）を自然史資料とし

て含めていることだ。歴史的資料にしても、文化的資料にしても、現在使用されているものや過去のものでも大量生産されたもの等は含まないのが常識らしい。一方、自然史資料は現在も生きているものも重要な意味を持つ。自然史資料に関しては植物標本にしても動物標本にしても資料館にしまっておいては意味がなく、常に研究用として使用されるものであり、同時に資料としての意味をも持ち合わせている。それゆえ他の資料とは扱い方にも多少ニュアンスの違いがある。

八丈島では生活者を含めて島全体を博物館にしようという構想があるらしい。生きたエコミュージアムである。島の自然はもとより、その上で生活する営み自体もいわば資料とみなし、生きたまま保存しようというのである。雨が降る、風が吹く博物館であり、資料館である。

〇〇会館とか〇〇ホールと名の付くものが随分たくさん出来た。実際にどのくらい利用されているのか、作ったのはよいが、維持費がかさみ、赤字が増える一方という施設が全国にどれだけあるか。いざ作ってみたものの使い勝手が悪かったり、計画通りに利用できないことが多いようだ。大学の資料館は、研究・教育活動の一環であり、資料を整理し、保管するスペースと研究室があれば、そして展示するスペースが学内に取れば資料館としての立派な建物を作る必要はないだろう。むしろ現在計画されているアカデミック・プロムナードのように学内の公共の部分をうまく利用する方が、よほど賢明であろう。アリゾナ州立大学のある学部では廊下の両側はすべてガラス張りのケージになっていて、珍しい砂漠の生き物が常に飼育されていた。ガラガラ蛇もいれば、タランチュラもいた。建物を建てるより別の方策を考える方

が気の利いた展示ができそうである。このように資料の範囲を広げてくると、動物園や植物園それに水族館も、また街中にある小さな展示場も資料館や博物館の範疇に入れてもよいことになる。

大学の資料館は誰のためにあるのか。もちろん大学の学生・教職員のためを第一義とすべきだろうが、これまでと違い大学の社会貢献や地域社会に開かれた大学という観点からすれば、大学の資料館は、学生・教職員のためだけでなく、地域社会の、または生涯学習の中心的存在となるにふさわしい機関だろう。資料館は毎日開館していても、行列して参観者があるわけでもなく、なにか工夫が必要であろう。あそこへ行けば、何か新しいことがある、何か新しいものに会える、そんな何かが必要だろう。

いつも何か新しい発見があるような資料館・博物館を作るとなると話は簡単ではない。夢かも知れないが、一つの方法は IT 革命といわれる時代、ネットワークで結んだ資料館・博物館をつくるのはどうだろう。これは日本でもまだ例を見ない。いくつかの施設をネットワークで結んで、他の博物館や資料館の展示物まで即座に見られるようにする。一つの施設に機能を集中・集積させるのではなく、県のものであろうが、市のものであろうが、私立のものであろうが、必要な場所に必要な施設を置き、双方向のネットワークで結ぶ、いわば『博物館ネットワーク』である。大学の資料館（またはユニバーシティ・ミュージアム）がその中心にある。こんなものがつくれないものだろうか。近隣の大小のミュージアムと称するものをすべてあつめた一つの連合体を形成して、互いに協定を結び、互いの資料をネットワークで提供し

あう。石川県には他県にない産業や工芸がある。ユニバーシティ・ミュージアムへ来れば、ホログラフィーを利用した三次元の映像として輪島塗や九谷焼の現場映像が見える。加賀友禅の絵付けも大画面のディスプレイ上に映し出すことができる。箔工芸の現場だって、能やその他の金沢独特の芸能だって見ることができる、となれば大いに意味のあるユニバーシティ・ミュージアムとなることができよう。本当に現場を体験したり、学習したりしたい人は直接出向いて行けばよい。逆にどこの博物館からも金沢大学の資料も見ることが出来る。角間に来なくても良いことになる。

金沢には随所にミニ博物館が設置されている。一つ一つ訪ねて歩けば実に楽しい。そういうところもグループに入れて、スタンプ・ラリーのようなものを実施するのも一案かもしれない。いかがなものだろう。

角間の里山学校とのドッキングも面白いアイデアだ。生きた教材に直接ふれ、自然の豊かさ、暖かさ、大切さを感じとる、これこそ生きた博物館である。角間の山は典型的な里山で、昔から近くの人々が大事にしてきたところである。里山は世話がある。放ったらかしておいては里山にはならない。里山と一緒に暮らしてきた人がいたから現在の里山があるといっても過言ではないだろう。

要は従来の発想からの脱却が必要である。新しい発想で考えたときに何が出来るか。手持ちの札をどう使えばいいかということになるのかも知れない。

（附属図書館長）